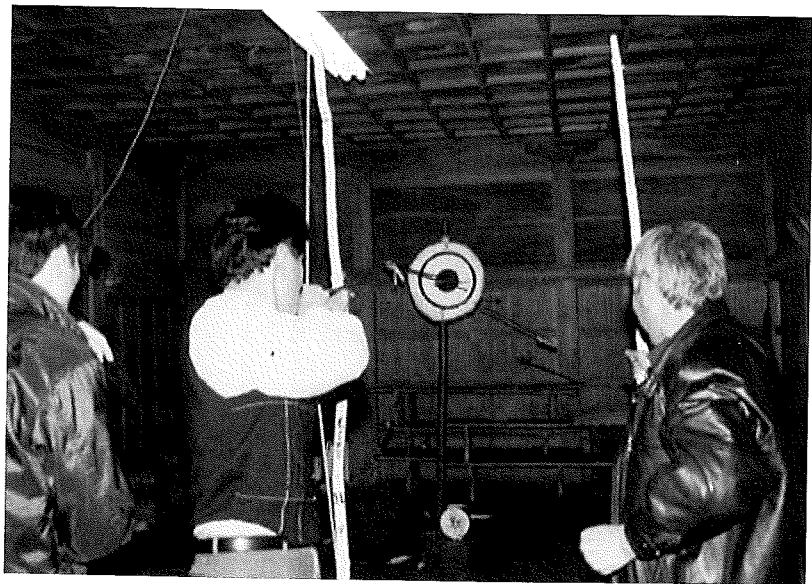


# 民俗



市川の正月の祭り、男児の無事な成長を願って行われる百矢的。  
ひゃくやまと  
 (市川 諏訪神社 H12.1.14)

## 17 東泉寺 南山地区大字畑瀬

宗派 曹洞宗 本尊 釈迦牟尼仏

由緒 創立天明年中(一七八一〜八九) 外不明

檀家数 一二〇戸 住職 武富敬法 敷地面積 二二六坪 建物 延九五・五坪 木造トタン葺

○ 無住で廃絶した寺院名を列記しておく

北山地区 円福寺(麻那古) 光妙(明)寺(藤瀬)

正善寺(下合瀬) 無量寺(古場)

薬王寺(大串) 瑞泉庵(中原)

花屋庵(上無津呂) 宝泉寺(上無津呂)

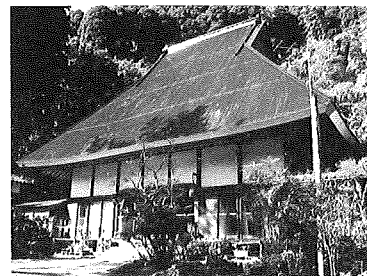
常福寺(大野) 常楽寺(下無津呂)

南山地区 正法寺(鎌原) 東光寺(菅木)

玉秀院(杉山)

小関地区 妙伝庵(須田) 大仙寺(関屋)

莊嚴院(関屋) 千福寺(関屋) 長泉庵(小副川)



東泉寺

## はじめに

かつての日常の生活は、朝早くから夜遅くまで仕事に明け暮れた生活であった。そのようななかには正月や盆、祭りなどの一年の節目ごとに行われる行事や、生後初の宮参りや結婚式など、人生の節目に行われる儀礼がある。この日には、ふだんは着ることのない着物を着て、酒を飲み餅などの特別な食物を食べ、特別な気分になった。日常の日々は、特別な日があることを指折り数えながら、その日に備えての節約を旨とする質素な生活の繰り返しであった。このように私たちの生活は特別なことが行われるハレ（晴れ）の日と、日常の生活のケ（褻）の日によって構成されている。

日々、繰り返し行われてきた生活は、有形無形の民俗そのもので、土地特有の習慣を育み伝え、戦後しばらくの間、そうした生活をしてきた。ところが、特有の民俗の消滅に拍車がかかったのは、昭和三十年代後半からの高度成長期以降、日本の社会組織が政治、経済、教育などあらゆる領域で大きな変革をしてから、このような生活は急激に変化する。高度経済成長の波をまともに受けた農村は生活の近代化のもとに次々と従来の生活が姿を消してきた。牛馬にかわって自動耕耘機などの、機械力が導入され、青年は都会へと流出し、農村は生活共同体としての機能を失い、それまで生活形態がユイや共同作業に頼っていたものが維持できなくなってしまった。

民俗の変化をいくつか見てみると、

社会生活の心の支えである神仏への思いも大きな変化をした。家には多くの神々や祖霊が、それぞれ場所を定

めて祀られていた。台所には火の神や水神が祀られ、便所や倉（収納小屋）にも神々がいると信じられてきた。これらの神々や祖霊に対し、正月や盆をはじめ、さまざまな機会に供え物をして祀り、家の安泰や家族の健康、豊作を祈願したが、火や水が容易に手にはいるようになり神々の存在が薄らいできた。

生から死までの一生における通過儀礼も大きな変化をとげたひとつである。これらの儀礼は個人の家だけのものではなく、ムラと関わりあることであつたが、家で行われていた儀礼が外の公的施設で行われるようになって消滅した。

例えば、出産は重大な出来事であり、自宅で姑や近所の人々に見守られながら出産していた頃は多くの儀礼が行われてきたが、出産が病院で行われるようになってきて著しい変化をした。出産方法や産の忌み、後産の処理などで生後すぐに行われる儀礼はすべて消滅したといつてよい。

婚姻と葬儀もそうである。これほど儀礼自体が合理化されたものはない。かつて花嫁は近所の人々が見守る中を行列をして婚家へ向かつたが、今やホテルや結婚式場で豪華さを競う儀礼になつてしまつた。葬儀も業者によりプログラムどうりに進められ、近隣の人々との関わりが少なくなつてきた。

生産過程を基盤として行われる年中行事も大きな変化をした。村落共同体としてのムラは産業構造の変化にもなつて解体し、従つて稲の成長にもなつて規制化されていた年中行事は消滅してしまつた。戦後、特に近年、クリスマスやバレンタインデーといった個人や一部集団化した年中行事が広く浸透し、かつてハレの意識を持つて行われていた村落共同体としてのムラ行事は少なくなつた。

さらに富士町は先に北山ダムで一部のムラが消滅し、また今回の嘉瀬川ダムで消滅するムラがある。この地で

営まれていた生活のすべてがムラとともに消滅してしまふのである。今やスピードと合理性を競う世の中になつてしまい、過去の習俗を見直すこともなくなつてしまつた。連綿と続けられたのにはそれなりの意味がこめられている。ここに記録することによつて先人の豊かな民俗生活を感じとつていただきたい。

民俗編を記載するにあつて次のことをおことわりしておく。

民俗は聞き取りをしたことをまとめたものであるが、いつのころ行われていた習俗か、時代の確定がむづかしいものがある。一部、過去に行われた民俗調査の資料なども織りまぜているので、今では確認することのできない行事等もある。

全ての集落で調査をすることを目的としたが、調査期間の関係上、時間的に不可能となり、特に嘉瀬川ダムが関係する集落については、調査が十分でなく、過去の調査資料等で補充をした。そのようなわけで偏つた記述も見られるがご容赦を願いたい。

民俗の記録は聞き取りを主としているので、明確でないことが多い。年代が確定できるものについては、明記しているが、わからないものは聞き取りのまま記載しているので、時代が前後しているところがある。

民俗特有の語彙と思われるものは、カタカナで表記し、判明できるものは（ ）内に標準語彙を記載した。相互に関連するものは、主と思われる項に記載し、（ ）内に参照項を記載した。

はじめに

この編でとりあげた項目はできるだけ一般的なものであるが、地域により、家により内容等に違いがある。ムラという表現は、一九七〇年世界農林業センサスが定義した農業集落に当たるものである。「一般に通称

する農村の部落に近いもので、一つの社会集団ではあるが、住宅団地のような社会集団とは異なり、生産と消費とが未分離の状態にある人々たちが地縁的、血縁的に結びつき、農業生産活動と生活の場として自然につくりあげてきた地域の社会集団のことである。農業集落は、地域社会としてある限定された領域をもっており、隣接する他の農業集落の範囲と区別されているのが一般的である」

文中で使用している、集落またはムラという表現は、意識的に使い分けをしているのではなく、同義語としてとらえていただきたい。なお、地名は旧村、大字、字が混在し統一されていない。

・民間信仰の遺物といえる石祠・石造物については、あまりにも膨大な数になったことと、それ以上に見落としがあると考えられるので、個々の所在地や銘文をあげることができなかったをお断りしておく。

・民話については昭和五十五年三月に富士町民話編集委員会が収集した『富士町の民話』より一部転載をした。

・町史編さんにあたり寄せられた寄稿文のうち民俗に関わる項目については一部利用させていただいた（敬称略）上津津呂・無津津呂昭、市川・水田春海、古場・嘉村さつ子他、記して感謝したい。

・掲載写真の多くは今回の町史編纂にあたり撮影したものであるが、一部既存の写真を利用した。

佐賀県立博物館の栗並の生活用具は博物館撮影によるものである。町教育委員会蔵の生活用具は今回撮影したものである。ほかに、氏名は省略するが利用した関係各機関および個人にお礼申しあげる。

・『宗教編』『集落編』と一部重複が見られるが、それぞれの観点から記述をしているのでそのままとした。

## 一 ムラの生活

### (一) ムラの構成

ムラは「ムレ（群）」から転じたことばだとされており、人々が群がり集まってできたところである。自分のムラ（集落）という意識の一つにムラ境に立てられた祈禱木がある。ムラ出入口である境は、内の世界と外の世界の接点で、出入りはすべてここを通過しなければならない。ムラの内側は定住地として、また生産地として自分たちの世界であり、その外側は異なる世界という意識があった。年の初めや季節の変り目に行われる村祈禱の祈禱木が村境に立てられるのは、外からやってくる災厄の侵入を防ごうとする意識が働いている。

#### 1 組織と機能

一般的にムラの内部は、ムラ内をいくつかに分けた内部組織がつけられている。居住の近隣性を一応の前提とし一定の機能を担った、地域区分組織を設定しているのが一般的である。

#### (1) 古賀

古賀はムラの運営にとって最小の組織で、行政上の連絡の単位である。古賀の名称は、ムラ内の相対的位置に